

平成29年2月10日

狭山ヶ丘通信

第148号

狭山ヶ丘学園

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>



トランプアメリカ大統領について思うこと

校長 小川義男

トランプ氏がアメリカ大統領に選出され、執務を開始するに伴って様々な話題を呼んでいます。テレビなどでは「トランプ」「トランプ」と呼び捨てにする政治家もいます。私は、このような非礼は謹むべきだと思います。

私は、彼の理念、政策に、特別に共感を抱く者ではありませんが、それにしても私は、大統領選挙に彼が勝利するであろう事は確信しておりました。我が国のメディアには、今も彼を不当に軽く見るような傾向があるように思いますが、各種の世論調査で、彼が最も高い支持率を獲得しているのは否定できない事実です。オバマ前大統領は、どちらかと言えば、相手の意見を常に受け入れがちで、その割りにその政治効果が充分とは言えなかった事実を、アメリカ国民は必ずしも同調してはいなかったからではないかと思えます。オバマ氏やその周辺には、「同性婚」を受け入れるような傾向が存在しました。同性婚を認めるべきだとの見解は、オバマ政権の時代に全米に勢いを持ち、その主張にはうなずける部分も少なくなかったように思えます。

確かに、我が国及び先進国の一部には、同性愛肯定、同性婚肯定の動きがあり、その主張には、共感できる一面もあります。

例えば、結婚している場合には、配偶者の一人が働き手となり、他の一人が扶養家族になって家事を支えることができます。一人が死亡した場合も、残った配偶者は相続法上極めて優遇される制度となっています。結婚し、家庭を形成している男女と、そうでない独身者の間には大きな違いがあります。これを差別と呼ぶかどうかはともかく、生涯を同居し、互いに支え合おうとしている同性者については、結婚に準ずる何等かの優遇措置が考えられるべきであるとも思います。しかし、それを同性「婚」と呼ぶ事には、明らかにひとつの無理があります。

民法では結婚とは「全生涯を目的とする両性の性的結合」と定義づけられています。要するに結婚とは、子孫を作り出すための社会的システムであるのです。独身男性、独身女性同士の相互の助け合いに、一種特別の支援を与える制度を作り出すことには私も

賛成しますが、それを「婚」と呼ぶ事には、私は賛成できません。オバマ政権の時代には、「これで本当に大丈夫なのだろうか」と思うようなリベラリズムが相当隆盛しました。「妊娠中絶の自由」の主張、流行などもオバマリベラリズムの影響であったと思います。

しかしアメリカには、それを健全な保守主義と呼べるかどうかはともかく、このような同性婚や妊娠中絶の自由に反対する、底深く分厚い保守的傾向が存在するのも事実です。トランプ氏は、一見、軽率とも受け止められやすいスピーチを繰り返していますが、アメリカにおける世論調査の過半数が、彼を支持しているという事実は、アメリカの保守主義の健全な側面を示すものとして、侮るのではなく敬意を以て接触すべきであろうと思います。

増して、自由の国アメリカの国民が、選挙で選出した大統領を、侮るかの如き言辞を弄する事は、絶対に慎まなくてはならないと思います。

石炭物語

校長 小川義男

石炭と言っても、今では知らない人が多いのではないのでしょうか。木炭ですら、知らない小学生がいるかも知れません。

木炭から説明しましょう。物は酸素がなければ燃える事ができません。木も同じです。今では目にすることの少ない炭焼き窯ですが、あれは二つの部屋に分かれていて、上の部屋には、ぎっしりと、木炭にする木を詰め込みます。そして、下の部屋には薪を詰め、これに火をつけるのです。猛烈な下の火で、上に密閉されている木は、真っ赤になりますが、酸素が入らないようにされているので、燃える事はありません。ただ、煙が出る、ごく小さい穴だけは開いていますから、そこから、木の中のある種の成分は煙となって出て行きます。しかし、この穴は小さく、熱されたガスは上へ上へと出て行きますから、空気が逆流して入ってくることはありません。この煙からは、色々な成分が出てくるのですが、そこに魚の干物などを吊しておくと、燻製になるというのですから面白いですね。

このように、酸素の供給を絶って赤熱し、木の中に含まれる余分な物を外に出すことを「乾留」と言います。

上の部屋で真っ赤に熱せられた木は、決して燃焼することなく、これが冷えたときには、黒い木炭になるのです。

石炭は、何とも不思議な「燃える黒い石」で、これは、地球という「化け物のような炭焼き窯」で作られた「燃える石」です。

今では石炭ストーブを焚いている家はありませんが、少し昔は、特に北国では、石炭がなければ生きて行けませんでした。汽車は、ほとんどすべてが、石炭を焚いて走っており、「ヤエモン機関車」もその仲間の、ひとりだったかも知れません。

日本全国に沢山の炭砒がありました。特に北海道、九州には沢山の炭砒がありました。炭砒で働いている人が、全国で30万人いたと言いますから、それがどれほど大きな産業だったか分かるでしょう。

それが昭和 37 年頃、全国で一挙に廃止されたのです。30 万人の勤労者と、その家族が仕事と収入を失ったのですから、それはたいへんな社会的騒動でした。勿論、会社は相当沢山の退職金を払って全員を解雇したのですが、それにしても日本全体が大変な騒ぎになりました。

どうして、それほど栄えていた石炭産業が減びることになったのでしょうか。それは、石油が安く手に入るようになったからです。蒸気機関車は石炭を焚いて走っていましたが、それはディーゼルカーや電気機関車に変わりました。電気機関車は、莫大な電気を使いますが、その電気を作り出す発電所が、石炭ではなく石油を使うようになりました。その石油は、石炭の三分の一くらいの値段で手に入るようになったのです。

政府も悩んだと思います。外国の石油を買って、自分の国の石炭産業を滅ぼすのですから、それは大胆で大変な悩みでもあったろうと思います。しかし、高い石炭を使って電気を起こし、それで工場を動かしたら、そこで作る製品も値段が高くなって、世界のマーケットでの販売競争に負けてしまいます。日本は、皆さんもご存じのように加工貿易国ですから、製品が高くなり、外国の産業に負けたのでは、国全体が生きて行くことができません。政府も、本当に大変な選択を迫られたものだと思います。

これは確かなことではありませんが、政府には、もう一つの考えがあったのではないかと思います。それは「資源の温存」と言う事です。我が国には地下資源があまりありません。銅の産出で世界一だったり、大量の金を産出したりした時代もありますが、今は、それも掘り尽くしてしまいました。国内のどこかに、大量の金や銅が埋蔵されていれば嬉しいことですが、そううまく話が運ぶものではないでしょう。

石炭は、将来採掘を始めるときがあったとして、少なくとも 500 年は掘り続けるだけの埋蔵量があると私は思います。おそらく千年分くらいはあるのではないのでしょうか。

世の中、何が起こるか分かりません。千年間も掘り続けられる可燃鉱物があるということは、日本にとって本当に素晴らしいことなのです。やがては石油もなくなります。そのときに大量の石炭が国内にあると言う事の強みを、将来に向けて持ち続けたい、そんな思いが、政府にはあったのかも知れません。

それにしても、そんなに沢山の石炭が、どうして作り出されたのでしょうか。色々言いますが、私にはただただ、不思議に思うほかはありません。

昔、石炭紀という時代がありました。油分をもの凄く沢山含んでいる木だったらしく、温度が非常に高い時代に、もの凄く繁茂していた、つまり茂っていた時代だったらしいのです。

でも、石炭の木も倒れたら、そのまま腐って仕舞います。山火事でも起きれば、灰になってしまえばかりです。「土中に埋まり、酸素の供給が絶たれて、そのまま超高温に保たれて乾留され」それが「燃える石」になった。言葉で言えばそのようなことになりますが、世の中にそんなことが本当にあり得るのでしょうか。

石炭は、地下数千メートルという所にも存在します。それを取り出すために、炭砒夫さんは地中深く潜った中で、石炭を掘り続けました。立て坑と言って、千メートル以上も深いところにエレベーターで降り、そこからトロッコに乗って、数キロ先まで移動し、そこで「採炭作業」を行うこともありました。45 度の斜坑で採炭作業を行うこともありました。私は、厚さ 50 センチくらいの炭層で、腹ばいになって採炭作業をしている炭砒夫さんを見た事があります。石炭を取り除いた後の岩盤を支えているのは一本の丸太だけでした。その丸太が、真ん中で折れかかっており、時々ミシリと音を立てるのです。そうかと思えば何メートルもある分厚い炭層もありました。一体石炭とは、本当のところ、どのようにして作り出された物なのでしょう。 (以下次号)